



芭蕉像（氣比神宮）

■元禄2年8月

江戸時代の元禄期、俳人・松尾芭蕉は「おくの細道」の旅で敦賀を訪れています。敦賀は「おくの細道」に記された芭蕉の最後の逗留地で、旅の大きな楽しみの一つでもあったようです。

*

元禄2年（1689）、芭蕉は江戸深川の庵から奥州へと旅立ちました。その後、奥羽山地を西に越え北陸路へ。このあと日本海沿いを南下し、敦賀を目指しました。

■氣比神宮「お砂持ち」

芭蕉は、木ノ芽峠を越えて8月14日夕暮れ、敦賀に到着。

その夜、月はよく晴れました。芭蕉は宿の主人に「仲秋の名月の明日の夜も晴れるでしょ



ますほの小貝



氣比神宮前交差点角に建つお砂持ちの像

芭蕉杖措きの地敦賀



出雲屋跡の石柱



芭蕉の木像。弟子の望月木節が芭蕉没後3年目に彫ったと伝える（敦賀郷土博物館＝八幡神社蔵）

敦賀半島ふるさと紀行

西福寺境内に建つ曾良文学碑（部分）。芭蕉に随行した曾良の日記と2人の行脚図を刻む▼



うか」と尋ねると、主人は「天

氣の変わりやすいのが越路の習いです。明日の夜が曇るか晴れるかは予測が付きません」と答えました。

また、主人から、氣比の宮に伝わるお砂持ちの神事のことを聞きました。

時宗では、総本山遊行寺の歴代住職を遊行上人と呼びます。その昔、敦賀を訪れた遊行二世の上人は、足場の悪い氣比社の社前を見て、自ら草を刈り、土石を運んで水たまりを埋め、参拝者の行き来の思いをなくしました。この故事にならない、代々の遊行上人が敦賀を訪れ、神前に砂を運びます。これをお砂持ちと呼んでいます。

この話が心に響いた芭蕉は

「月清し遊行の持てる砂の上」の句を詠みました。

翌15日は、主人の言葉どおりに天気は崩れ雨が降りました。そこで「名月や北國日和定なき」の句が生まれました。

■西行にひかれ色が浜へ

16日には、敦賀湾を色が浜に舟を走らせました。わびしい法華宗の寺（本隆寺）で一時を過ごしましたが、夕暮れの寂しさは感に堪えました。そこで、「寂しさや須磨にかちたる濱の秋」の句が。

色が浜は平安末・鎌倉初期の歌僧、西行法師が訪ねたところ

貝拾ふとて 色の濱とは言ふに やあるらん」という歌を残しています。

「ますほの小貝」は赤みを帯びた、小指の爪先ほどの小さな貝です。

■芭蕉逗留の宿

芭蕉に随行した河合曾良の日記によれば、芭蕉の泊まった宿は唐人橋町（現・相生町）にあり、出雲屋といました。宿のあるじは弥市郎。相生町の大通りの歩道上に跡地の石柱が立っています。

芭蕉を迎え、色が浜に案内した人物は回船問屋を営んでいた天屋玄流（俳号）で、時には水魚とも号した俳人でした。敦賀ではその後も芭蕉ゆかりの俳人らが出ています。

■杖措きの地

「おくのほそ道」には、弟子の露通が敦賀まで迎えに来て、最終地の岐阜県大垣に戻ったとあります。このため敦賀は事実上の「終焉の地」「杖措きの地」とも呼ばれています。



敦賀市の花でもある菺